

3月11日東北地方を襲った未曾有の大津波は多くの人々の命と財産を奪って行きました。ちょうど1か月前、青森から岩手の港町を訪ねた私にとっては一層の思いがありました。

3月下旬、車をチャーターして友人達に同行をと誘いましたが、危険だから行くのは早いと断られました。それではせめて大災害ニュースに隠れて報道されない県内だけでも見舞って来ようと思ひ立ち、4月3日の朝、君津を出発しました。幸い飯岡出身の友人が同行案内してくれました。銚子連絡道から旧光町を経て九十九里海岸へ出て、海岸沿いの30号線を北上致しました。津波災害が目立ち始めたのは八日市場から流れ出る「新川」あたりからでした。

川には堀、小川、川と大きさがありますが津波はその大小の川を問わず、川を突破口として周辺の物をなぎ倒し、飲み込んで行く凄まじさを見せ付けられました。

いくつもの小さな川沿いの建物は跡形もなくやられて居りましたが、新築のブロック塀は東北より津波が小さかったせいか、家を守る役目をして居りました。九十九里海岸で大被害があったところは飯岡町海岸市街地であります。

屏風ヶ浦南端の刑部岬の飯岡灯台から飯岡漁港、市街地を眺めると原因が一目瞭然の景観が目に入りました。

多分？九十九里海岸へ押し寄せ潮流に乗って北上する津波と、刑部岬と飯岡港を守る大堤防と大岸壁に付き当たり、南へと方向を変え、北からの津波は飯岡町の沖合でぶつかり、市街へと突入したと思えます。海岸に積み上げられた残骸の山と破壊力の凄まじさを感じました。

4～5寸の家の柱は、割り箸を無雑作に折ったように皆へし折られており、車も又おもちゃの車をハンマーでたたいたように簡単に形を変えておりました。

飯岡港は大堤防、大岸壁と迷路の様な港の航路にも助けられて多くの漁船はしっかり守られて居りました。

銚子の中心街を通り抜けてかもめ大橋を渡り、Uターンして東庄町へ入りました。ここは瓦の町で知られて居りますが、まちが古いせいか軒並み屋根瓦が落ち、青いシートをかぶった家が続いておりました。

途中小見川の旧友を訪ねて佐原へ入りました。知り合いの名物団子屋で一服すると店の主人が出てきて「小野川沿いの道が液状化で川の岸壁が壊れてしまったので、側道を曳く山車は今年は無理でしょうね…」と嘆いておりました。

香取神社の灯籠がみな倒れてしまったので是非見て行くよう言われましたので、参道を上がって行くと旧知の宮司が迎えに出てくれて「春日灯籠」109基が倒れてしまいました。県内では灯籠300基、鳥居が20基、倒れたようですと言われました。

千葉県重要文化財となっている友人平塚新兵衛さん福新呉服店の瓦は落ち、土蔵の壁も…やがて90歳近くになる奥さんはめげずに店を開き、頑張っておられました。浦安、我孫子までと書いておりましたが佐原で日が暮れました。日本人には世界に誇る高いモラルと勤勉と忍耐があります。技術も経済力もあります。失われた命、家財は戻らないけれど、教訓を生かし、あきらめず、夢と希望を持って前進しよう！私がか月前に見たあの美しい東北の港町、雪と寒さの中で共に分かち合い、助け合って生きている強いきずな、幾度も困難の中から立ち上がって来た国民性と驚嘆の歴史を信じて、東北に今までよりももっと明るく暖かい 灯が灯る日のためにも、私達に今与えられている天職に感謝し頑張るべきであります。

